

武蔵野日曜集会

生くるはキリスト

――ピリピ書第1章――

1992年3月15日(武蔵野)

小池辰雄

獄中書翰の一番終り ピリピ伝道 恩恵と平安 形と生命 終末的現在 汝らを恋い慕う いずれも宣べるところはキリスト わが生くるはキリストなり わが生くるは空気なり 魂は空を飛ぶ これはるかに勝るなり 霊心体一如

【ピリピ1】

1 キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピにおるキリスト・イエスに在る^{すべ}凡ての聖徒、および監督たちと執事たちとに贈る。
2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

3 われ汝らを憶う^{おも}ごとに、我が神に感謝し、4 常に汝ら衆のために、願のつどつど喜びて願をなす。^{あずか}5 是なんじら初の日より今に至るまで、福音を弘むることに与るが故なり。^{うち}6 我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給うべきことを確信す。^{まつと}7 わが斯くも汝ら衆を思うは当然の事なり、我が^{すべ}縲綯にある時にも、福音を弁明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵に与るによりて、我が心にあればなり。^{めぐみ あずか}8 我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋い慕うか、その証をなし給う者は神なり。^{すべて}9 我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟とによりて彌^いが上にも増し加わり、^{なわめ}10 善悪を弁え知り、キリストの日に至るまで潔くして躋く^{つまつ}ことなく、^{めぐみ}11 イエス・キリストによる義の果を充して、神の栄光と誉とを顕さん事を。

12 兄弟よ、我はわが身にありし事の反つて福音の進歩の助となりしを汝らが知らんことを欲するなり。^{たすけ}13 即ち我が^{なわめ}縲綯のキリストの為なることは、近衛の全營にも、他の凡ての人にも顕れ、^{おそ}14 かつ兄弟のうちの多くの者は、わが^{なわめ}縲綯によりて主を信する心を厚くし、懼る事なく、ますます勇みて神の言を語るに至れり。^{めぐみ}15 ある者は嫉妬と分争とによりてキリストを宣伝え、あるものは善き心によりて之を宣伝う。^{のべつた}16 これは福音を弁明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリストを宣べ、^{なわめ}17 かれは我が^{なやみ}縲綯に患難



を加えんと思ひ、誠意によらず、徒党によりて之を宣ふ。18 さらば如何、外貌にもあれ、真にもあれ、孰も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。19 そは此のことの汝らの祈とイエス・キリストの御霊の賜物とによりて、我が救となるべきを知ればなり。20 これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適えるなり。21 我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。22 されど若し肉体にて生くる事わが勤勞の果となるならば、孰を選ぶべきか、我これを知らず。23 我はこの二つの間に介まれたり。わが願は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遙に勝るなり。24 されど我なお肉体に留るは汝らの為に必要ななり。25 我これを確信する故に、なお存えて汝らの信仰の進歩と喜悅とのために、汝等すべての者と偕に留らんことを知る。26 これは我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかわる誇を増さん為なり。27 汝等ただキリストの福音に相応しく日を過せ、さらば我が往きて汝らを見るも、離れて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、28 凡ての事において逆う者に驚かされぬを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡の兆、なんじらには救の兆にて、此は神より出づるなり。29 汝等はキリストのために常に彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり。30 汝らが遭う戦闘は、曩に我の上に見しところ、今また我に就きて聞くと同様に同じ。

●獄中書翰の一番終り

「ピリピ人への手紙」というのは獄中書翰の一番終りかも知れません。非常に特色のある手紙です。パウロの個人的な気持が一番強く表れている。

吉川英治は小学校くらいしか出ていない。後は独学です。疎開して青梅に行つて、仆れな人だ。だから、今の普通の学校教育は随分無駄が多いと思う。本当に打ち込むと、あれだけの大きな仕事ができる。やっぱり、人間は、ある一つの対象に向かつてまっしぐらに進むのが一番本当の歩き方だと思ふ。偏差値がどうの、平均値がどうのなんて、そんなことを言っていたら、「人間」ができやしない。日本の教育の事はいろいろ問題だらけです。本当の意味においては、人間ができなければどうにもならない。

ピリピ書ですが、獄中書翰は――大体これはほとんど定説くらいになっていますけれども――ローマで書いた。エペソ、ピリピ、コロサイ、もう一つ、ピレモンというのがある。



これが獄中書翰です。

ピリピは紀元50年か、51年頃に、第2次伝道の時に、ヨーロッパでもって最初にできた教会です。これは使徒行伝の16章をご覧ください。ピリピ書は、それから10年たって、ローマの牢屋で書いた。ピリピ伝道から10年後の、61、62年頃に書いたんです。

「¹¹さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、¹²彼処よりピリピにゆく。

アレキサンダー大王のお父さんはピリポというので、それからきたピリポイという名前の町になった。第2次伝道というのは、エルサレムから発^たつて、カイザリアから岸に沿って、小アジア半島の方へ向かって行く。もつと北へ行こうと思ったら、示されて、ずっと西の方へ行かされる。そして、トロアスから船にのつて、ミネアポリスへ、それからピリピへ行く。小アジア半島からギリシア半島に向かつて最初に行った、最初のキリスト者ができた非常に大事な所です。

●ピリピ伝道

ここはマケドニアの中に、この^{あたり}辺の第一の町にして殖民地なり、ピリピはギリシアと小アジア東方とのちょうど、口の所、大事な連係の所です。

われら数日の間この町に留る。¹³安息日に町の門を出でて^{いのりば}祈場あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、¹⁴テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。¹⁵彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに^{すす}勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留れ』^し斯く強いて我らを留めたり。

「キリストがその心を開き」

というから、キリストの霊がこのルデヤに働きかけた。ギリシア語では「リデヤ」という。この女性が最初にクリスチャンになった。そして家の人にも伝わっていった。

「家族もバプテスマを受けた」

と書いてある。

¹⁶われら^{はしため}祈場に往く途中、^{うらない}卜筮の^{つか}霊に憑れて^{うらない}卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする^{はしため}婢女、われらに遇う。¹⁷彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは^{いとたか}至高き神の僕にて汝らに救の道を教うる者なり』¹⁸幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』^{使徒16・11、18}霊ただちに出でたり。」(使徒16・11、18)

「イエス・キリストの名によりて」は、「によつて」ではない、



「イエス・キリストの名の中にあつて」

だ。「名の中から言うぞ」と。「聖名によつて」という言い方はあまりよくない。「聖名にあつて」です。その中でその中からものを言う。「聖名にある」ということは、キリストと本当に一つになっていないと、ただ「聖名にあつて」と口で言つたつてダメですけれども。

「イエス・キリストの聖名に在つて汝にこの女より出でんことを命ず」

と。手島さんも私も昔はやつたです。妙な霊がいると、

「聖名にあつて出でよ!」

と言うと、本当に霊がその人から出ていつてしまふ。ガタンと倒れたりする。今は、あなた方は質が良いからいいけれども、妙な霊がそれでもつて出ていくんですよ。

「¹⁹然るにこの女の主人ら利を得る望のなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司^{つかさ}たちに往き、²⁰之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、²¹我ら 로마人たる者の受くまじく、行^{ならわし}うまじき習慣を伝うるなり』²²群衆も齊しく起り立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞^{しもと}にて打たしむ。²³多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。²⁴獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎^{かせ}にてその足を締め置きたり。²⁵夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、²⁶俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどろに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。

これは霊震です、単なる地震じゃない。そこの一箇所が震うんですから、いわゆる地震じゃない。こういうところが普通、分かつてないね、みんな。神の霊の働きですから。霊震です。

²⁷獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜き、て自殺せんとしたるに、

どうせ、責任上殺されるから、自殺しようとした。

²⁸パウロ大声に呼わりて言う『みずから害^{そしな}うな、我ら皆ここに在り』

逃げて行きはしないよと。

²⁹獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、

³⁰之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』

これは地震でなくて素晴らしい力が働いたということ。獄守は直感したんだ。だから平伏してしまつた。

³¹二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』³²斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。³³この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、³⁴かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を



信じて喜べり。」(使徒16・19～40)

御霊のバプテスマを受けてしまった。全家族とも神を信じて、みな喜んでしまった。もうエライ事だね、パウロの伝道は。パウロは、しょうなんて思わなくなつて、力が働くから。こういう凄い事が使徒行伝にはある。とにかく、大変なひとです。「大変なひと」と言つても、実はパウロではないんだ、これはみなキリストだから。

こういうことがあつたわけです。これがピリピ伝道です。それで、ピリピの教会の人達は、もちろん人数は少ない。けれども、非常にパウロの言葉をまともに受けて、非常に親しくなつた。それは、キリストの喜び、力、愛、生命、それで親しくされている。いわゆる人間的な親しさではない。どこまでも中心は、キリストが中心です。活けるキリスト、霊的キリストが中心。

これが、人間の間を親しくするのが本当の親しさです。いわゆる人間的に親しくするのは、そんなものは大抵くずれてしまう。それは、今までの私の伝道の跡をみても分かる。横だけを見ている人はダメなんです。縦の関係をしっかり立てて、それが結んでいる糸は切れない。ということは、

「その人の癖がどうだ、欠点がどうだ」

と、そんなことをお互いに問題にしないから。そういうことを問題にしている人は、大抵ダメになつていく。自分自身もダメになつていく。ハッキリしている。

だから、10年たつても、ピリピの教会の人たちは非常にパウロと、その意味において、親しいわけです。だから、

「お前たちに会いたくてもしょうがない」

と書いてある。

●恩恵と平安

それではピリピ書1章の方に行きましょう。

「キリスト・イエスの僕たる我ら、パウロとテモテと、書をピリピにおる

キリスト・イエスに在る凡ての聖徒、および監督たちと執事たちとに贈る。

「僕」「ドゥーロス」という字は「奴隷」という字なんです。僕というのは、もちろん奴隷制度があつたから、その言葉を使ったので、奴隷は主人の言う通り何も反抗できない。反抗したら殺されてしまう。だから、絶対服従――「服従」という言葉は好きでない――「信従」だ、信じ従う。

「もうキリストにとつ捕まつてしまつて、私はどうにもならん。しかし、相手がキリストだから、楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない、自由でしょうがない」

と。とにかく、しょうがない世界です。語らざるを得ない、力が及ばざるを得ないと。



「テモテ」は、テモテ前後書があるとおり、非常に大事な弟子です。お父さんはギリシヤ人、お母さんはヘブライ人です。

さつき読んだ伝道の後、10年たつての話ですけれども、10年でなおさら、ピリピの人たちは素晴らしくなった。だから、

「キリスト・イエスに在るところの」

と書いてある。「聖徒」というと、何か、聖人みたいに思うけれども、そんなことではない。

「キリストの十字架・聖霊で救われた者」

それが「聖徒」です。人間的には欠陥があつたつて、そんなことは問題じゃない。ハッキリと救いを受けとった者、それが聖徒です。人間というのは、すぐ、人の欠点だの癖だのを気にしたりうわさしたりする。そんなことをやっているうちは、本当の聖徒じゃない。本当の聖徒というのは、そんなことを問題にしないで、キリストだけを問題にしている。

2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と

汝らに在らんことを。

よく、手紙の始めや終りにこういうことを書く。パウロは決してそれを儀礼的に書いているのではない。パウロの手紙は――新約聖書はどれもそうですけれども――およそ無駄がない。旧約はたくさん無駄がある。これも「恩恵と平安」ですよ。本当の恵みを受けなければ、必ず平安はくる。「恩恵」とはキリストを受けとることが恵みなんだ。恵みの主体はキリストなんだから。それから、いろんな賜物たまものというものがあるけれども、「賜物」と「恵み」とは違う。「カリス」というのは「恵み」という字で、「カリスマ」というのは「賜物」なんだ。恵みの内容は、

「十字架の贖いと聖霊」

です。

「キリストそれ自身」

といつてもいいわけだ。

●形と生命

「聖徒」と先に言つて、それから、「監督、執事」と言っている。これは、いろいろ面倒をみる人たちという意味なんです。後から、いわゆる教会制度ができ上がつて、それで「監督、執事」というひとつの役割ができたが、ああいうのとは違うんです、このパウロがこう言っているのは。だから、普通なら、監督と執事を先に書いて、それから信者というような言い方をするけれども、これは逆なんだ。救われた者たちが大事なんで、監督も執事もみんなこれは聖徒なんだ。その中で特にお世話をやっている人、それが「監督・執事」だ。年齢の上からも、経験の上からも、ということでしょう。

何でも「形」が整つてしまうとダメなんだ。まあ、形は、人間だから或る程度は整つて



もしやうがないという面もあるけれども、どんなに形ができて、形に捕らわれたらダメ。そうかと思うと、無教会みたいに、形が全然なくて、完全に個人主義的になってしまつても、これまたダメ。本当の有機体的な構造になっていない。何々主義というでしょ、「無教会主義」とか。もし、幕屋が「幕屋主義」なんて言つたら、これもダメなんだ。主義に固まつたらダメなんだ、イズムになつたら。本当の生命の世界はイズムじゃない。共産主義だとか、社会主義だとか、自由主義だとか。主義じゃないんだ。

ゲーテも「イズム」という言葉は大嫌いだった。非常に自由な人だから。私もこの「主義」は嫌いなんだ。いわゆる主義にもそれぞれのよさはある、けれども、それが硬化して他を否定するようなことになつたら、これはダメ。要するに、本当の生命の世界は、硬化現象は起きない。聖霊の生命は硬化しない。

3 われ汝らを憶うことに、我が神に感謝し、
もう何も疑っていないよ、賛美しているんだ、と。

4 常に汝ら衆のために、願のつどつと喜びて願をなす。
「喜んでゐる、何も疑っていないよ、うれしくてしようがないんだ」

と。素晴らしいね、このピリピ教会というのは。ユダヤ教がまた少し何とか言うようなことがあつても、ピリピ教会の人たちがそんなものは排除してしまう。

「我々はユダヤ教ではありません。モーセではありません。キリストですよ」

5 是なんじら初の日より今に至るまで、福音を弘むることに与るが故なり。
「初の日より」と書いてある。十年も昔の初めの日から、よくやっててくれて、うれしくてしようがない、というわけだ。

●終末的現在

6 我は汝らの衷に善き業を始め給いし者の、キリスト・イエスの日まで之を
全うし給うべきことを確信す。

「キリスト・イエスの日」とは何ですか。再臨のことです。

「キリストはやがてまたやっていらつしやる」

と。キリスト自身も、

「やがて、また来るぞ」

とおつしやつた。また、弟子たちもみんなそう思っていた。

「神の国はもう目前に迫っている」

と。二千年たつてもまだ来ない。けれども、まだ来なくても、

「それでは、これから何年たつたら来るだろうか」

ではない。質的にはしよつちゅう、



「神の国は明日にも、今日にも」

といって待っている。それを「終末的現在」という。我々は、キリストや使徒たちと同じに、終末的現在に生きている。

「世の終りはもう近い」

と。「再臨運動」なんて、内村先生がやったことがある。第一次戦争があつて、内村先生は非常に今の文明にがっかりして、

「もう再臨した方がいい」

といつて、再臨の祈りの運動を始めた。終末的現在、世の終りを間近に見ているところの現在です。終末的現在において書かれたものが、新約聖書なんです。新約聖書の言葉は、マタイ伝から黙示録まで、その現在において書いている。だから、

「世界はいつひっくり返つても結構だ」

と。問題は、終末的現在において、そこに終末的世界を、即ち天国をみずから現じて歩いているか。それだけが問題です。天国を現じて歩いていたのはキリストです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書のキリストの在り方を見ると、彼は身辺に天国を現じていた。素晴らしい言と素晴らしい業を次から次へと展開していった。死人まで甦らせた。全部、これは天国の予表です。イザヤ書35章を現実展開していたのはキリストです。そういう見方を、ユダヤ人ができないのは情けない話なんだ、ユダヤ教というのは。イスラエル人というのは本当に固い。パウロがあんなにひっくり返ったのに、

「パウロは間違つた」

なんて言っている。冗談じゃない。イザヤ書の素晴らしさを、ユダヤ人は分らないらしい。イザヤ書の中には、

「アッシリヤもエジプトもイスラエルも皆、神にあつて兄弟ではないか」

というような言葉もある。それを、しょっちゅう喧嘩しているでしょ、今、中東は。

「イザヤ書を読み返せ、イスラエル人はもつと大きくなれ」

と言いたいところです。

終末的現在、天国を現ずる。我々は天国人だ。キリストに救われている「聖徒」というのは天国人だから。地上を歩いている天国人。地上は仮りの宿の所だ。

我々は本当は旅人だ。「旅人」「よそ者」という字は、「ゲール」というヘブライ語です。地上は仮の宿、みんな我々は旅人なんです。よそ人。モーセは、出エジプトしたのは「ゲール」なんです。我々は「出我」、己から出た、そういう「ゲール」なんです、生まれつきの自分から出てしまっている、出我している。

また、「除け者」が「ゲール」です。キリストがユダヤ教の「ゲール」なんです。宗教改革者も皆そうです。よそ者にされてしまう。別な言葉でいうと、「異端者」です。ところが、異端者の歴史が本当の歴史なんです。妙なもんだ。



● 汝らを恋い慕う

7 わが斯くも汝ら衆を思うは当然の事なり、我が繚綯^{なわめ}にある時にも、福音を弁明して之を堅うする時にも、汝らは皆われと共に恩恵^{めぐみ}に与るによりて、我が心にあればなり。

「自分は牢屋でもってやっているけれども、繋がれたって、自分の魂はつながっていないよ。身体はつながれていても、魂は繋がれていない。だから言いたいことは言っているんだ」

と。

8 我いかにキリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋い慕うか、その証^{あかし}をなし給う者は神なり。

「キリスト・イエスの心をもて汝ら衆を恋い慕う」

と、強い言い方をしている。素晴らしいね、ピリピ人との交わりは、

「キリスト・イエスの心でもってつながっていて、何がこれを裂くことができるか」

と。我々のいわゆる「コイノニア」「交わり」というものが、キリスト中心でなかったら、これはダメです。どこかで崩れてしまう。

9 我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟^{さと}によりて彌^{いや}が上にも増し加わり、

これは、ちよつと大事な言葉です。

「愛といつても、盲目的な愛は困るぞ。ちゃんとした、神に示されているところの

知識、悟り、よく状況をわかまえる、そういう自覚のある愛でなくてはダメだ」

と。パウロはなかなかそういうところは抜け目ない――抜け目ないという言い方はおかしいけれども――「明智」を持て、というわけだ。「明智」でも「叡智」でもいい。

「知情意」というでしょ。知識の世界と、情の世界と、意志の世界。カントの哲学の、「純粹理性批判」というのは「知識」だ。「判断力批判」というのが「情」の世界、「実践理性」の世界が「意」の世界です。この三つの世界を、カントが哲学で非常に深く追求した。「三大批判書」というのがそのことです。この「知情意」のバランスが本当にとれていなければいかん。このバランスをとってくれるものが聖霊なんです。聖霊というものが、そういう素晴らしいものだということを、普通のクリスチャンも分かっていない。聖霊の内容というものは素晴らしいものだから。聖霊がちゃんとバランスをとる。生まれつきの我々の、単なる知情意ではダメだ。これを本当に光をもつて、バランスをとって、素晴らしいものにしていく。知も、情も、意も、もの凄いことになる。いろんな働きをする。そこでもって現れるものは、キリストの栄光、神の栄光なんです。

10 善悪を弁え知り、キリストの日に至るまで潔くして蹟くことなく、イエス・

キリストによる義の果^みを充^みして、神の栄光と誉^{ほまれ}とを顕さん事を。

パウロらしい表現だね。



● いずれも宣べるところはキリスト

12 兄弟よ、我はわが身にありし事の反^{かえ}つて福音の進歩の助^{たすけ}となりしを汝らが知らんことを欲するなり。13 即ち我が縲^{なわめ}縛のキリストの為なることは、近衛の全營にも、他の凡ての人にも顕れ、14 かつ兄弟のうちの多くの者は、わが縲^{なわめ}縛によりて主を信ずる心を厚くし、懼^{おそ}るる事なく、ますます勇みて神の言を語るに至れり。15 ある者は嫉妬^{ねたみ}と分争^{あらそい}によりてキリストを宣伝え、あるものは善き心によりて之を宣伝う。16 これは福音を弁明するために我が立てられたることを知り、愛によりてキリストを宣べ、17 かれは我が縲^{なわめ}縛に患難^{なやみ}を加えんと思ひ、誠意によらず、徒党によりて之を宣ぶ。18 さらば如何^{いかん}、外貌^{うわべ}にもあれ、真^{まこと}にもあれ、孰^{いづれ}も宣ぶる所はキリストなれば、我これを喜ぶ、また之を喜ばん。

パウロというのは、でっかいね。

「外貌^{うわべ}でも真^{まこと}でもいずれも宣べ^のるところはキリストだから、私はこれでいいと思つて喜んでゐるよ」

「喜べ、喜べ」と、この手紙は書いてある。

「いろんなクリスチャンがいるけれども、仕方がない。ただ、キリストをやつてゐるから、うれしいよ」

と。

19 そは此のことの汝らの祈とイエス・キリストの御霊の賜物によりて、我が救となるべきを知ればなり。

「いろんな奴の間にいるけれども、私はそれで動かされない。それは本当にイエス・キリストの御霊の賜物をちゃんと頂いてゐるから」

と。パウロくらい、賜物の豊かな人はちよつとない。知の上でも、情の上でも、意の上でも。実にパウロはキリストに次ぐ人だ。

● わが生くるはキリストなり

それから、今度は今日の主題の所にいく。

20 これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊^{ちやう}かも臆^{おそ}することなく、生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇^{あが}められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適^{かな}えるなり。

「キリストの讃美は、自分が生きていても、死んでも、それによつてキリストが讃美されることだけを自分は問題にしているんだ」

と。自分の功績なんてものはひとつも考えてない。問題は、キリストに本当に誉められるか、キリストの名が記されるか、それだけです。



²¹我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。

この言葉です、21節。

「我にとりて、生くるはキリストなり」

ギリシア語でも、そのとおり書いてある。これはパウロの言葉だから、パウロはギリシア語で書いた。

「エモイ ガルト ゼーン クリストス」

簡単なんだ。「生くることは」(ト ゼーン)という、特に動詞的な言い方になっている。

「生きるということはキリストである」

と。我々は、

「キリストの中に」(エン・キリスト)

と言うでしょ。ところが、パウロは、「エン」も取ってしまつて、

「キリストだ」

と言つた。

「生即主」

と。もう、「エン・キリスト」の「エン」も要らないというんだ。「エン・キリスト」という言葉は、パウロはもちろん使っているけれども、これはもう極致の言葉です、

「生くるはキリストなり」

という言葉は。それは、パウロはこれだけキリストに祈り、またその業をしていたから、

「生くることはキリストだ」

と。まあ、それはそうでしょう。けれども、

「それでは、我々はどうしてくれるか。『生くるはキリストなり』と言えるか、言えないか」

と。問題は我々のことです。

「なかなか、言えません」

と、大体、100人のうちの99人がその答えかも知れない。

「生くるはキリストなりと、そう簡単には言えません」

と。ところが、「生くるはキリストなり」と、もし言えなかったら、それはクリスチャンではないんだよ。こちら側の実存を考えたらダメなんです。

「自分のキリスト者としての実存はどの程度だ」

なんて言つて、そんなものを考えているうちは、いつまでたつてもダメなんだ。いいですか。それは、大いに努めることは悪くはないよ。悪くはないけれども、それを問題にして考えているうちは、また、一生懸命でただやっているうちは、それはダメなんだ。



●わが生くるは空気なり

私は、別な言葉で言おうか。

「わが生くるは空気なり」

と。この大気です。

「私が生きているのは空気だよ」

と。寝ている時に、あなた方、何か考えていますか。考えて息を吸っていますか。全然、無意識でしょ。全然無意識で、空気を吸っているでしょ。でなければ、窒息して死んでしまふものな。これはもう、本能的なわざだね、我々が空気を吸っていることは。あなた方が聞いていても、私がしゃべっているでも、空気は吸っている。寝ていても、我々の心臓という生きた時計は、しょっちゅうカチカチとやっている。心臓の鼓動がおしまいになったら、この世にサヨナラというわけだ。それが「生くるは大気なり」ということ。肉体は、

「わが生くるは大気なり」

と、即しているわけだ。我々の肉体の生命は空気に即している。今度はこの魂の世界で、

「わが生くるはキリストなり」

と。無条件なんです、これは。こちらの生き方がどれだけ福音的であるとか、聖書をどれだけ勉強したとか、そんなことではない。

「キリストさんがいなければ、私はどうにもならん。こっち側のどうだこうだではありませんでした。こちら側のどうだこうだではなしに、キリストの十字架は完全に贖ってくれました」

と。

「こちらの信仰の在り方でもって、十字架の恩恵が少し薄くなるか」

なんて、冗談いうなど。

「善き者にも悪しき者にも、陽を照らせ、直き者にも直からざる者にも、雨を

降らせる」

と、それが父の恵みであつた。キリストの恵みであつた。十字架は、絶対無条件に我々を贖ってしまったっている。過去・現在・未来の小池は、あなた方一人一人は、これはもう贖われてしまっているんです。よく、讃美歌で、

「潔めたまえ、贖ってください」

なんていう讃美歌があるが、私はあんなのはとても歌ってられない。

「もう贖われております。根底は潔められております」

なんだ。あんな讃美歌で、

「だんだん、そのうちに潔まる」

と、そんなことではない。いいですか。無条件というのはそういうことなんです、「無条件の恩恵」というのは。こちら側の自覚とか、そんなことではない。無意識で空気を吸って



いるように、私たちはもはや存在そのものが、キリストで贖われ切ってしまったている。

●魂は空を飛ぶ

だから、こうやって生きているのは、こちら側の信仰の実存の如何にかかわらず、絶対にキリストなんだ。これは凄い世界です。これはもう完全に「ゼロ」の世界です。また、完全に「無限大」の世界です。だから、私はもうやりきれんです、この恵みは。そういう境地に入ってごらん、空中に浮かぶような気持ちになってしまいうから。本当だよ。

私は鳥がうらやましい。空を飛ぶ。私は人間でなかったら鳥になりたい。無軌道で歩けるから。だけれども、本当の魂の自由の世界は、羽がなくても飛んでいるんだ。完全に、相対的な生死をのり越えている。

「生くるも死ぬるも」

と、パウロは言っているけれども。生死をのり越えてしまふ。そんな世界を超越してしまつて、死んでも死なないんだ。「生くるはキリストなり」というのは、
「もうキリストで生きていますから、これは永遠に生きています」ということ。

²¹我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。

「死ぬるもまた益なり」とは、

「死ぬ方がもつといいぞ。もつと結構なことだ」

ということですよ。というのは、天界ではキリストと本当に一つとなつてしまっているから。要するに、

「キリスト無しには自分はいない」

ということ。

「空気なしにはこの身体はどうにもならん。そのように、キリスト無しにはどうにもならないように、とっつかまつてしまっているから、こつち側の何ものでもありませんでした」

と。本当に祈りの世界で、その世界に入つてごらん。もう、たまらんから。何も祈る必要はないんだ。もう、

「主さま、ありがとうございます」

の他は何も祈る必要はない。もう、

「主さまー」

だけでたくさんだ。もう祈りは「主さまー」だけ。

「父よ！」

と、キリストは「父よー」でたくさんなんだ。それがこの、

「生くるはキリストなり。死ぬるもまたキリストなり」



です。この「生くる」は相対的な「生きる」だったけれども、これはもう、相対が絶対の世界なんです、この「生くる」は。だから、「死ぬるも」なんて言う必要はない、何も。「生死一如」なんです。相対的な生死は問題でない。そのようなキリストにとつ捕まっていれば、もう完全に聖霊の世界です。

「何ものがこれを奪うことができるか」と。

●これはるかに勝るなり

22されど若し^も肉体にて生くる事わが^{はたらき}勤勞の果となるならば、孰^{いずれ}を選ぶべきか、我これを知らず。23我はこの二つの間に^{はさ}介まれたり。わが願^{ねがい}は世を去りてキリストと偕に居らんことなり、これ遙^{はるか}に勝るなり。

全くそのとおり。

「牢屋に繋がれていて、もうさっさと向こう側に行きたい。けれども伝道のためにはまだいくらでも生きていますよ」

ということですよ。

24されど我なお肉体に留るは汝らの為に必要ななり。

「あなたの方のために、もうしばらくいますよ。けれども、やがてどうせ自分は殺されるから」

と。これは、仏教の悟りの世界も素晴らしいけれども、それ以上の世界です。パウロは盛んなるかな。それだけの生命力が溢れていますか、皆さん、どうですか。「生くるはキリストなり」と。

「パウロだから、そうだったけれども」

ではない。我々一人一人が、正に「生くるはキリストなり」が、本当は無条件に言えるわけです。何も条件が要らん。こっち側の何かではないんだから。福音の世界は無条件の世界ですから、条件は要らない、何も。

「何々牧師はどうだ、何々先生はどうだ」

なんて、そんなことを言っているうちはダメです。何を言っているか。もうちゃんちゃらおかしいよ、何のかのとゴタゴタ言っているのは。そういう無条件の世界に、パウロがこの、「わが生くるはキリストなり」

と言ってくれたのは、本当にうれしいね。

「あんたもそうか」

「はい、その通りです」

と、我々一人一人が無条件に言える。無条件だから、これが言えるんですよ。条件がついたら、「生くるはキリストなり」なんて、これは言えない。



「そうか、パウロはそんなに立派に生きているのか。キリストをそんなに証しているのか」

と、そうじゃないんだ。証しの如何ではない。そこに、もの凄い力がくるから、証しせざるを得ない、働かざるを得ない。みんな、そのように展開していくんです。書かざるを得ない、仕事をせざるを得ない。みんな、力が来るから。その根本は、この絶対のキリストが空気みたいだから。霊気だから、魂が霊気を吸っているんだ。今、肉体の空気の例えを言ったのは、今、気が付いて言っただけけれども。

「さつさとキリストの所に行きたいよ」

と、ハッキリ言っているんだ。

「これはるかに勝るなり」

と。まあ、盛んなる人なるかなだね、パウロという人は。散々、死にそうな、たくさんの苦難に遭いながら――コリント後書11章――それを突破してきたんだから、彼は。正にキリストが動いていた。

●霊心体一如

25 我これを確信する故に、なお存^{ながら}えて汝らの信仰の進歩^{よろこび}と喜悦^{よろこび}のために、汝等すべての者と偕に留らんことを知る。26 これは我が再び汝らに到ることにより、汝らキリスト・イエスに在りて我にかかわる誇^{ほこり}を増さん為なり。27 汝等ただキリストの福音に相応^{ふさわ}しく日を過ごせ、さらば我が往きて汝らを見るも、離れて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦い、28 凡ての事において逆う者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡^{ほろび}の兆^{しるし}、なんじらには救^{すく}の兆^{しるし}にて、此は神より出づるなり。

その通り。何が来ても、驚かない、恐がらない。いいですか、

「霊を一つにして、心を一つにして」

という言い方。「霊」とは御霊のことです。御霊にある霊でなければこの場合の霊ではないわけです。ギリシア語では「御霊」の「御」の字なんかない。ただ「霊」と書いてあるだけ。それを「御霊」と訳したり、あるいは「霊」と訳したり、いろいろです。

みんな、顔が違う、考え方も違う、わざも違う。けれども、「御霊は一つ」。そこにおいて、キリストにあつての「心は一つ」。この「心」というのはそういうことだ。

「キリストの心は一つ、キリストの霊は一つ」

と。即している心のことですよ。みんな、これは即している霊のことです。キリストも、豊かな心を持っていらつしやった。霊と心と。

「霊で祈り、心で祈れ」



とパウロは言っている。これも、霊、心、一、如、なんだ。霊、心、体。これが三つの言い方です。霊において、心において、体からだにおいて。霊、心、体、一、如。全存在的なんです。これは個人の場合、大勢の場合には、この「体」は入ってこない。霊と心まで。体は皆、別々だからね。キリストの霊、キリストの心に一つになつていけば何も恐くない。

「彼らには亡びのしるし」

それを受けとらない者たちには亡びのしるしになる。

「お前たちには救いのしるしだ」

と。全くその通りですね。

29 汝等はキリストのために啻ただに彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜わりたればなり。30 汝らが遭あう戦闘は、曩さきに我の上に見しところ、今また我に就つきて聞きくところと同じ。

「キリストを受けとれば、キリストと同じ苦難を、十字架を負っていくんだ。それは皆、力が来るからできるよ」

というわけだ。何も力りきむ必要はない。頑張る必要はない。よく

「がんばれ、がんばれ」

と言うね。気の毒になるよ。がんばる必要はない。力が来てしょうがないんだ。

だから、読んでいて、楽しいでしょ。「難しい」なんて言っているのは、まだ頭で読むからむずかしいんだ。魂で読んでいけば、ひとつも難しくなく、楽しい。そして、その中心になる言葉をしっかりと捕まえないければダメですよ。

今日の中心は、

「生くるはキリスト」

ということ。相対的でありながら、もう絶対の世界です。キリストが皆さん一人一人の中で、本当に生きざるを得ない。

「生き方がどうである」

じゃない。あるがままで、

「キリストなしにはどうにもならない」

という世界です。「キリストなしにはどうにもならない」と本当にそれをつかまえてくださいよ、捕まえられる。そしたら、俄然、そこで力が来てしまう。

「我もなく世もなし。ただ主のみ在いませり」

という世界です。そういう讃美歌があったね。そういう、「無我の我」なんです。

「エン・クリスト」

という現実それから出てくる現実で、その奥は

「ただキリストのみ。生、即、主」

という世界です。

